

『玉あられ』受容史

田中 康二

一、「玉あられ」というジャンル

本居宣長は『古事記伝』をはじめとする古典文学作品の注釈を行うのと並行して、国語学に関する研究を進めた。宣長の語学研究は大別して二つの範疇に分類される。第一は『てにをは紐鏡』『詞の玉緒』を代表とする文法研究、とりわけ係り結びの研究である。『万葉集』や『八代集』を主な素材として、膨大な数の和歌をデータ化し、係り結びの法則を定式化した。そもそも係り結びについては、中世歌学や近世堂上歌学において、その一端はもちろん知られていた。だが、これを文献実証主義に基づいて実証し、単純な法則にまで

洗練させたのは宣長の功績である。係り結びの研究は、近代的な国語学研究の幕開けを示していた。この研究の延長として、用言の活用に関する研究を位置づけることができる。第二として、『字音仮字用格』『漢字三音考』に見られる、日本に渡来した漢字の字音に関する研究である。前者は漢字の字音にどのような仮名をあてるのが正しいか、ということ、やはり膨大な古書の用例に照らして考究したものである。後者は漢字音のうち、古くに伝わった呉音・漢音とその後伝来した唐音について検討したものである。このような二つの系列に分類される宣長の国語学研究は、それぞれ

にすぐれたものであり、現代の古代日本語の研究の基盤を創ったと言っても言い過ぎではないだろう。それらの宣長の著作は筑摩書房版『本居宣長全集』の第五巻にまとめて収録されている。その当該巻の中に『玉あられ』が収録されているのである。

『玉あられ』は広い意味では語学に関する業績ではあるが、如上の二系統とは一線を画する研究書である。その違いをひと言で言えば、二系統の語学研究はあくまでも古代語を後世とは異なる言葉として客観的に考究するアプローチであり、『玉あられ』は対象とするのは古代語であるが、それを用いて和歌を詠み、和文を書く時に必要な知見を過不足なく提示するという、実践的アプローチである。誤解を恐れずに抽象化すれば、純粹研究と実作応用の相違ということができるだろう。それゆえ、それらの受容のされ方も自ずと異なることになる。二系統の語学研究は、宣長説を先行研究として踏まえつつ、あらたな見解を付け加えながら修正され、近代以降も厚い研究史を形作っている。その一方で、『玉あられ』は古語を用いて歌を詠み、和文を作る

ということ常とした近世期には、主に国学者や歌人の間で大いに称揚されたが、近代以降にはそのような需要がなくなり、顧みられることもなくなった。そういった意味で、『玉あられ』は歴史的役割を終えた書物ということもできるが、近世後期における受容史は、国学という学問が有する本来の特徴を考える上で大いに意味があると言えよう。『玉あられ』という書物は、当時のジャンル意識では、ある面で歌学書とも言えるし、考証随筆にも分類できる。また、語学書の性格も有している。しかしながら、それらのどれにもびつたりとあてはまることがない。『玉あられ』の刊行は、新たに「玉あられ」というジャンルを作り出したというのが実情に近いのではないか。

そこで本稿では『玉あられ』の近世後期における受容史を検討するが、その前に『玉あられ』の成立、刊行の経緯、およびその意味を明らかにしたい。『玉あられ』は歌の部と文の部の二部構成で、助詞や助動詞の意味や用法に始まり、敬語の用法に至る、計百十項目より成る。詠歌や作文に必要な知見を網羅的に集成し

たものである。『著述書上木之覚』によれば、寛政三年九月九日には松坂の書肆柏屋兵助に版下を渡している。翌月の十月七日には本居春庭宛に次のような手紙を送っている。

玉あられも弥京都二而願相済、早々板行ニ取か、
り候筈ニ候。高蔭序、出来申候。

三都への流通を意図して、京都の書肆を通じて出版許可願が出された由である。なお、奥付には、「京都書林」として林伊兵衛と錢屋利兵衛の二肆が名を連ねているが、主版元は錢屋利兵衛と推定される。また、巻頭に掲載される三井高蔭の序文が出来てきたことを伝えている。つまり原稿がすべて整ったわけである。この書簡を書いた四日後の同年十月十一日付の高蔭宛書簡には、次のようなことが書かれている。

愈御安全御坐被_レ成候哉。承度奉_レ存候。然ば序文御清書御見せ被_レ下、致_二拝見_一候処、甚見事ニ奉_レ存候。然バ板下御自筆ニ御認被_レ成候而可_レ然奉_レ存候。夫故料紙為_レ持上申候。此間之系ニ而御認可_レ被_レ下候。尤句切り濁り等ハ、此方ニ而付ケ可_レ申

候。左様御心得下_レ被_レ下候。夫共是非他筆ニと思召候御儀ニ御座候ハバ、岩崎へ相頼可_レ申。左様候ハバ、御清書并此間之系、此方へ御越し可_レ被_レ下候。以上。

序文の表現や内容に満足しているようで、これを高蔭自筆で仕上げることを提案している。ただし、区切りや仮名の清濁については一任してほしい旨を伝えている。また、他筆とすることも可能であると記している。末尾に「急用書」とあることから、用件を急いでいたことがうかがえるが、総じて順調な滑り出しであったと考えることができる。それから二回の校合刷りの確認をして、寛政四年五月八日には版本を落掌した。

版本は門弟の許へも届けられたようで、同年六月七日付横井千秋宛書簡には次のように記されている。

一、先達而玉あられさし上申候処、被_レ入_二御念_一候御紙面、拝見仕候。本仕立あまり悪クも不_レ被_二思召_一候段被_二仰下_一、大悦仕候。此書ハ京都ニ而も別而能広マリ申候由、追々承り、大悦仕候。此節ハ定而御地書林へも廻り可_レ申と奉_レ存候。

二度の校正をおこなったにもかかわらず、誤植の見落としがあったようである。^(注1) それでも千秋からは満足の返答があったことを喜んでゐる。それに加えて、京都でもよく売れていることを聞いて大喜びしているごとくである。宣長は名古屋の書林でも取次販売が行われることを希望しているのである。この他に萩原元克や辻守瓶など、各地の門弟の許にも届けられたようである。^(注2) 本書が初学者をも射程に収めた門弟のために出版されたことがわかる。

そのことは序文にも書かれている。「玉あられまなびのまどに音たてておどろかさばやさめぬ枕を」という歌を巻頭に置いて、『玉あられ』刊行の意図が記される。

のりなが、近きよの此わろきくせを、世人どものさもえさとらで、たゞよしとのみ思ひをるが、かたはらいたさに、それおどろかさまほしくて、常にみゝなれたることども、おもひ出るまゝに、これかれと書出て、いささかづゝさだめいへり。もらせることはなほいと多かるを、そはみななずら

へてもさとりねかしとぞ。

近年の歌文の悪癖を指摘し、これを改めることができるように知らせることが目的であるという。「おもひ出るまゝに」というところに、本書の叙述の特徴を読み取ることができる。要するに、体系的に構成された書物ではないというのである。また、「もらせることはなほいと多かる」というところを見ると、宣長の死後に『玉あられ』関連書が次々と刊行されることを予感していたかのようにもある。それはともあれ、本書がその名の通り、学びの窓に集う人々の眠りを覚ますことを目的としているというわけである。

このように『玉あられ』出版は門弟への指南のためであったが、その目的は必ずしも門弟に伝わったわけではなかったようである。しばらくして次のようなことを記している。^(注3)

宣長ちかきころ玉あられといふ書をかきて、近き世にあまねく誤りならへることどもをあげて、うひ学のともがらをさとせるを、のりなががをしへ子として、何事も宣長が言にしたがふともがらの、

其後の此ごろの歌文に、此書に出せる事どもを、なほ誤ることのおほかるは、いかなるひがことぞや。此書用ひぬよそ人は、いふべきかぎりにあらざるを、それだに心さときは、うはべこそ用ひざるかほつくれ、げにとおぼゆるふしぐは、たちまちにさとりて、ひそかに改むるたぐひもあるを、ましてのりながが教をよしとて、したがひながら、改めざるは、此ふみよみても、心にとまらず、やがてわすれたるにて、そはもとより心にしまず、なほざりに思へるから也。つねに心にしめたるすぢは、一たび聞ては、しかたちまちにわする、物にはあらざるを、よそ人の思はむ心も、はづかしからずや。これは玉あられのみにもあらず、何れ（イッ）の書見むも、おなじことぞかし。

『玉あられ』を出版したにもかかわらず、門弟たちが同じ過ちを繰り返していることを嘆いているのである。門弟以外の者でも密かにこれを読んで参考に行っているのに、門弟の過誤が改まらないことに苛立ちをおぼえている。『玉あられ』を読んでいないのか、読んでいて

も心が虚ろなために忘れてしまうのか、いずれにしてもいい加減に考えているからであると憤慨しているのである。このように『玉あられ』を出版した後も、依然として門弟が歌文を作る際に過誤を犯すことに神経を尖らせていることを鑑みて、本書の意図は明らかであろう。すなわち、『玉あられ』は門弟の歌文指南のための参考書だったのである。

二、江戸派の批判―『玉あられ論』・『玉霞付論』

『玉あられ』は、奥付には「寛政四年壬子春發行」とあるが、前節でも述べたように、宣長の許に届けられたのは寛政四年五月八日のことであつた。それから一年ほど経て、批判書が記されたことを知る。横井千秋宛書簡に次のような文面がある。

一、玉あられ難論、并二高蔭返答共入三御覽一申候。
右新書故、方々見申度望申候者有レ之候間、何とぞ早く御返し被レ下候様仕度奉レ希候。（寛政五年八月十一日付横井千秋宛宣長書簡）

『玉あられ難論』というのがそれであるが、三井高蔭が

これに對して反論を著したという。千秋は『玉あられ』について出版早々に、宣長に自らの意見を伝えるほど熱心であったからであろうが、両書を借りて千秋が何を考えたのかは不明である。それはともあれ、宣長がこの時点で『玉あられ』の批判書を目にしていたことがわかる。それでは、この『玉あられ難論』は誰の著作なのか。宣長はこれを小沢蘆庵だと考えていたようである。^(主)やはり千秋宛書簡の中で、次のように記している。

一、玉あられ難文之儀、京都蘆庵と申候ハ相違ニ而、蘆庵ニ而ハ無御座、江戸表ノ人ニ而御座候。江戸より参申候。作者ハ相知レ不申候。此方より返答ハ三井高蔭書申候。(寛政七年正月二十日付横井千秋宛宣長書簡)

『玉あられ難論』の著者が蘆庵であると伝えていたのは誤りで、「江戸表ノ人」であると訂正しているのである。その返答は高蔭がしたという。高蔭の返答の件はさきの書簡にも言及されていた事実である。それでは、なぜ『玉あられ難論』の著者がわからなかったのか。

ここで、この『玉あられ難論』について、実際に出版もされた『玉あられ論』であると同定することにした。それは三井高蔭の反論が備わっていることと、著者が「江戸表ノ人」であるという情報に合致するからである。『玉あられ論』は標題の「玉あられ論」のほか「玉霰付論」というものが合綴された形となっており、そこには次のように匿名で記されていたのである。

玉あられ論―優婆塞竺禮
玉霰付論―淺草の里人

跋―宝田村のくすし

この三人の匿名著者について、宣長が正確には把握していなかったことが千秋宛書簡からうかがえる。このことについては、宣長の没後になって平田篤胤から松坂に、次のような情報が寄せられた。

一、江戸にて申ふらし候は、玉あられ論は、春海とみつ子がしわざにて、高蔭ぬし御弁めされ候のち、春海が元より故翁の御もとへ、あやまり申入候やうに噂仕候。いかゞに御座候哉。(文化二年七月一日付本居大平宛平田篤胤書簡)

噂では『玉あられ論』は「春海」と「みつ子」の仕業であるというのである。春海は村田春海で、「みつ子」は安田躬弦である。^(注5)高蔭の「弁」が出てから、春海が宣長に謝罪したというのであるが、これについては真偽のほどは明らかではない。ともあれ、江戸在住の篤胤でも『玉あられ論』の著者について、噂のレベルでしか知らなかったということである。

同じく江戸在住の斎藤彦麻呂は『玉あられ論』の著者について、それぞれ次のように推定している。^(注6)

優婆塞竺禮ニ村田春海

浅草の里人ニ加藤千蔭

宝田村のくすしニ安田躬弦

この彦麻呂説に基づいて、鈴木淳氏は『玉あられ論』の著者を一旦はそのように推定した。^(注7)しかしながら、その後、揖斐高氏が次の四点について吟味し、鈴木説に反論した。

一、天理大学付属天理図書館春海文庫蔵『玉霰付論』が春海自筆で伝存すること。

二、寛政四年当時の春海の住居が「浅草寺中姥が池

のほとり」であったこと。^(注8)

三、『玉霰付論』の序に、宣長と「浅草の里人」が旧知であるというのは、天明八年三月に春海が松坂を訪問した時のことであること。

四、『玉霰付論』「文の部」における長文の論理的展開は議論に長けた春海に似つかわしいこと。

以上の四点は『玉霰付論』の著者が村田春海であるということを立証するものであって、十分に説得力を有する議論である。このことにより『玉あられ論』における匿名の正体は、必然的に次のようになる。

優婆塞竺禮ニ加藤千蔭

浅草の里人ニ村田春海

宝田村のくすしニ安田躬弦

この推定には、斎藤彦麻呂説によって異説を唱えた鈴木淳氏も賛同している。^(注9)もちろん、この説は根拠となる資料が現れた現在において正しい説であるといえるのであって、斎藤彦麻呂がそうであったように、同時代においては匿名性は保持されていたと考えてよい。むしろ、匿名であったからこそ、それに対する反論が

書かれたと考えることもできるのである。ここでは『玉あられ』における注目すべき批判書が間を置かずに世に出たということが確認されれば十分なのである。

さて、それでは『玉あられ論』において、なぜ千蔭や春海は『玉あられ』を批判しなければならなかったのだらうか。千蔭と春海は天明末年から寛政初年にかけて、それぞれの理由で人生の転機を迎え、期せずして真淵門弟という原点に回帰することとなった。千蔭は『万葉集略解』の執筆を始め、春海は『賀茂翁家集』の編纂を始めたのである。いずれも師真淵の衣鉢を継ぐ事業である。そのために宣長に協力を要請した。とりわけ、千蔭は『万葉集略解』を著すに際して、『万葉集玉の小琴』における宣長説の引用について協力を求めたのである。その書簡は寛政三年十二月に宣長に届き、翌四年正月六日付で宣長が返事を出している。そのような真淵門弟同士の麗しい交流が始まったばかりであるにもかかわらず、その年の九月には千蔭と春海は批判書を執筆したわけである。このことをどのような考えればよいのか。

江戸派の面々、とりわけ春海は『玉あられ』「文の部」における批判が真淵の文章に向けられていると判断したのである。それは、『玉霰付論』の中に真淵の名（賀茂の翁）を挙げて批判していることからわかる。春海は三箇所で「賀茂の翁」に言及している。順に見ていきたい。

（一）某がしるす 某がいふ

〔玉〕 近きころの人、文のしりに、みづからの名を、へ某がしるす、へ某がいふとかく。此がもじひがこと也。此詞をおくべきところにあらず。すべて^レのといひ、がといふことは、所によりて、かなはぬこと多くて、思ひのほかにつかひにくき詞なるを、近世人その味をしらざるから、かゝるみだりなることもあるなり。

〔付論〕こは賀茂の翁の好てかゝれし事なり。此事はすでに人の多くとがめいふ事なり。こは事さまなる事ながら、この翁のかく書れたる意は、人の書たらんごとくにわざといひなすを、おもむきとしてかゝれしなり。こは漢文にかゝる体あれば、

それをまねばれしなり。さて某がといへば打まかせては人のうへをいふ詞なる事は、童もしれる事なり。これをがもじの意を心得ずしてかゝれしなりとおもへるは、かへりて心浅かりき。此翁のかく斗の詞の意をわきまへざる事やはあらん。こはたゞ好ましからぬ書ざまなれば、ならふまじき事などいひてあるべきなり。又がといふ詞をみづからの事にいへる事もあるなり。おのがわがといふも、みづからをさしてがといへり。籀木の巻に、なにがしがおよぶべき程ならねばといへるも、馬頭がみづからいへる詞なり。また式部が所にといへるは人をさしいふ詞なり。かゝれば人のうへも我うへも、いひなしによりて、がといふなりけり。

『玉あられ』に、文末に自分の名を「某がしるす」などと書くが、その「某が」とするのは語法的に誤っており、「某の」とするのが正しいとしている。これに對して『玉叢付論』は「こは賀茂の翁の好てかゝれし事なり」と始めている。つまり、当該項目が真淵の文章を對象にして批判していると認識しているのである。そ

うして反論を始める。真淵がそのような書き方をしたのは、他人が書いたかのように装うことを趣向としたという。そのような趣向は漢文にもあつて、それをまねたのである。そうして「某が」といえば一般的には他人のことをいうことは子供でも知っている。それを「が」という語の意味を理解せずに書かれたと思うのかえつて思慮が浅い。真淵翁がその程度の言葉の用法を知らないことはありえない。ここでは好ましい書き方ではないから、見習うべきことではないとも言つておけばよいのだ。また、「が」という語を自分のことに用いることもあり、「おのが」「わが」というのも自分のことをさして「が」と言っているのだ、という。最後には源氏物語の用例を出して反証している。このようにさまざまな角度から反論を構成するのである。

(2) 道行ぶり

〔玉〕道ゆきぶりとは、道にてゆきあひふれたるをいふ。然るに此ごろの人のかける物を見れば、旅路の日記のことを、然いへるあり。いみじきひがことなり。

〔付論〕日記の事を道行ぶりといへるはひがことなりといへるは、事のよしをくはしくしらでいふなり。こは倭文字が伊香保の道の記を、賀茂の翁の筆削せられし時、其道の記の名を、道行ぶりと名付られしなり。いとおもしろき、名のつけざまなりといふべし。道の記は道行ぶりに見きく事を何くれとしるせるものなれば、ことわりもよし。これをいにしへに例なしとて、ひがことなりとおもへるはかたくなし。文のみやびはかゝる名などのおへにもたくみある事なり。かゝる趣にくらければ、其かける文のつたなきこそむべなれ。

『玉あられ』は「道ゆきぶり」という語が道ですれ違ふことであつて、旅日記のことではないとし、そのように表現するのは大変な間違いであると断定している。これに対して『玉霰付論』は、やはり真淵のことを念頭にして反論している。油谷倭文字の紀行文『伊香保の道ゆきぶり』について、当初は「伊香保の道の記」であつたのであり、これを真淵が添削して「伊香保の道ゆきぶり」になつたのである。この命名の由

来を宣長が承知していたとは考えられないが、春海はこの条項を真淵への批判と受け取つたと考えられる。春海はこれに続けて、いくつかの根拠を示して「道ゆきぶり」の意味用法が誤用ではないと主張する。最後に宣長批判を書き付けたのは、それだけ腹に据えかねるものがあつたのであろう。

おそらく春海が最も憤慨したのは、末尾の項目「時代のふりのたがひ」であつたと思われる。『玉あられ』は次のようなものである。

(3) 時代のふりのたがひ

今の人の文は、時代のわきまへなくして、中昔のふりなる文に、奈良以前の詞も、をりくまじり、又ふるきふりなる文に、むげに近き世の詞もまじりなどして、かの鳴声ぬえに似たりとかいひて、むかし有けむけだものこのちするぞ多かる。

和文を書く際に、選択する言葉に時代の新旧をわきまえずに用いる弊害があり、それらが混在しているために「鶴」のような文章と感ぜられるというのである。宣長自身は歌を詠む時にも、古風と後世風を詠み分け

るということを提唱しているので、文章においても言葉の混用は許せなかったたのである。この批判に対して、『玉叢付論』は敢然と反論する。長いので区切りながら見ていきたい。

此論は、賀茂の翁の文をそしめる人の常にいふ事なり。ことわりもていふ時は、古ぶりの文は古の詞のみ用ひ、後の世のすがたの文は、後の世の詞のみにてつくるべき事のやうなり。されどこは文かく事をよくもしらで、たゞことわりをもておしてしかならんとおもひていふなり。

新旧の言葉が混じる「鶴」のような文章は「賀茂の翁の文」を攻撃する人が常に言うことであるという。これは『玉あられ』の末尾の項目でもあるので、真淵批判であることを重視し、是非とも反論しなければならぬと考えたのであろう。言葉の新旧が混交することがよくないというのは理屈の上では正しいとした上で、それを忠実に守ろうとするのは作文の実状をよく知らない者の机上の空論であるというのである。そうして続ける。

およそ文といふものは、唐もやまとも、後の世にありて古のすがたの文をかくには、古の詞のみにてつくるべきものにあらず。そは後の世の事を古にうつして書わざなれば、古になき事は、かならず後の詞をあやなして、古のすがたになぞらへていはでかなはぬことなり。古の文と、今の文と勢をよくうつす時は、後の世の詞も、古の文に交ふべし。さはたえらみなくてみだりに古の詞と後の詞をまじへ用ふる時は、木に竹つぎたらんやうにも見ゆべし。されど上手の書たらんには、さるけぢめを人に見すべきものにあらず。

そもそも後世において古文を書く場合に古語だけすべてを書くことはできない、という。文には「姿」と「勢」があつて、それを適切に模することができれば、言葉の新旧は問題ではない。言葉の選択の問題である。それがうまくいけば上手の文章になり、失敗すれば木に竹を接いだようになる、というのである。

又古の詞のみをあつめたりとも、古のすがたと勢をうつさずは、いかで古ぶりの文と見ゆべきや。

この姿といきほひをしることはかたき業にて、こをみづからうつしかゝんは、かたしともかたきわざなり。また古の詞のみ、つたなくひろひあつめん事は、わらべの業にもなし得つべし。さはた何のかたき事かあらん。されば古ぶりの文々、姿いさほひをうつすにありて、詞はかならずいにしへのみなづむべきことにあらず。古は我國の文のうへのみならず、から人の古ぶりの文つくるも皆かくのごとし。また其古今の姿と勢とをしりてよく詞をえらむこと明かならば、後の世の詞の、古ぶりの文に入べきをしり、又古の詞の後の世の文にまじふべきをしらん。

「姿」と「勢」とが文章を構成する上で最も大切な要素であつて、単に言葉を羅列しただけでは駄目だといふのである。もちろん、その「姿」と「勢」を知ることが至難の業であるが、それをマスターすれば和漢を問わず、よい文章が書けるというわけである。この後も延々とよい文章を書く極意を述べている。それは『玉あられ』が古語か後世語かといふことのみに拘つてい

ることから解放し、その言葉の用法に意を用いるといふことである。ここには宣長と春海との間にある文章観の相違がうかがえる。ただ、そのような議論を展開するに至つた契機は真淵の文章を非難されたといふことであつた。

実際のところ、宣長は真淵の文章について含むところがあつた。少し時間は前後するが、春海が上京した天明八年三月十日、松坂を訪れ宣長に面会した。会見の場で何が話されたかは定かではないが、賀茂真淵を顕彰する書物を著すことが話し合われたことは確かである。同年三月十八日付宣長宛春海書簡には次のような文面がある。

左候へバ右遺集ノコトニ不_レ寄、彼是御疑問申上候義も可_レ有_レ之候。必御厭なく御教示被_レ下候様奉_ニ希上_一候。もとより学業ノ上ニてハ非他ノ拙者義、諸事御腹藏なく被_ニ仰聞_一候様仕度候。さてさて近年世上一統ニ御盛名相達し、誠ニ的差仕候事ニ御坐候。

『右遺集』（賀茂翁家集）について、忌憚のない意見を

うかがいたく教示を願ひ出ているのである。宣長の令名は江戸にまで届いているといったことまで記している。これはおそらくお世辞ではなく、本心であつたに違いない。約束の通り、春海は『賀茂翁家集』を編纂するにあたって、宣長に協力を求め、その草稿を見せた。すると、思いも寄らない反応が返ってきた。宣長は真淵の歌文を添削して寄越したのである。宣長に依頼したのは確かであるが、まさかここまで真淵の歌文に手を入れてくるとは思わなかつた。すぐに春海は次のような文面の書簡を宣長に出した。

翁ノ家集も彼是故障有^レ之候而、今ニ上木不^レ仕候。文ノ部後便ニ可^ニ奉呈^一候。御吟味可^レ被^レ下候。歌ノ部ノ御校正、一一御尤なる御事と奉^レ存候。乍^レ去先状ニも申上候通、翁ノ誤られ候事も、悉クあとより改メ申候はあしかるべく、たゞあまり浅かなる誤のみを改メ申候様ニ奉^レ存候。とても翁ノ時ハ学問未^レ開、貴兄ノ御発明ニ而開ケ候事ノ多候ヘバ、それらハ翁ノ集ハ、誤ノま、ニ仕置可^レ申候。さならでハ、翁ノ心づかれしやうに人存候も

如何。又さのみハ改めにくき筋も有^レ之候。とても翁ノ集精選ニハ相成まじく候。誤謬ハさるものニ而、一体奇絶ノ才識ある所ヲ、人もとり可^レ申事と奉^レ存候。(寛政八年六月二十五日付宣長宛春海書簡)

文の部はさておき、歌の部における宣長の「校正」が本文の「改変」になつてしまつていることを春海は訝つていたのである。たしかに真淵の用例に誤りがあり、それを批評した宣長の指摘は正しいが、それをことごとく直せば、真淵の作品ではなくなつてしまふのではないか、というわけである。「誤謬」もまた真淵の特徴と考えるべきだということであろう。このような宣長の添削癖は、もちろん真淵作品に限つたことではなく、あらゆる文学作品に対して行われた。^(註1) こういった宣長の校正意識は、本文を忠実に復元するという、現代の本文批評理論に照らせば、過誤に満ちた恣意的な本文観と言わざるを得ないが、宣長の中では極めて正しい処置であつた。^(註2) 宣長にはそのような処理をする自信があり、根拠があつた。それは長年の間に培われた

古典研究の蓄積による見識であり、真贋を見抜く眼力であつた。『玉あられ』に取り上げられた用例は、そのような見識のほんの一部である。真淵の文学作品をめぐる宣長と春海の見解の相違は、間違つた本文でもそれを尊重するという方向性と、本文を正しい法則に基づいて改変しても構わないという方向性の違いと言つてよい。『玉あられ論』における春海の論難は、真淵作品を平然と批判する宣長に対する憤懣から出発したと言へるのではないだろうか。

三、門弟の反論―三井高蔭『弁玉あられ論』

江戸派の二人が匿名で『玉あられ』を批判する文章をしたためたのが寛政四年九月、それに「宝田村のくすし」(安田躬弦)の跋文が付されたのが寛政四年十月であつた。そこには次のような言説がある。

此二書にいへるごとく、本居のぬしは古の学にたけたる人なれど、あまりにくはしきに過てなづめる事も多かんめり。はた文かき歌よむ事をもとより其得ざる所にてつたなき事いふばかりなし。

そはかの玉あられの序文かける三井某が言葉作りのつたなきをさる事とおもひて見過したるにてもしられたり。この文どもとみに灯の下にうつしたれば、いとみだりがはしうて人に見すべくもあらずなん。

『玉あられ論』と『玉霰付論』を総括する跋文である。そこには宣長が学問的にはすぐれているけれども、歌文は苦手であつたことを指摘し、そのことは三井高蔭の序文の拙さを見抜けなかつたことに表れているといふのである。要するに『玉あられ』を全否定するといふことを表明したわけである。これを見た三井高蔭はすぐに反論をしたため、宣長に見せた。寛政五年八月には高蔭の反論が出来上がったという。そのことは前章で触れたとおりである。

自分の文章の拙さを指摘されるのは仕方がないが、それを見逃したということ、宣長先生のことまでも批判されたのであるから、黙っているわけにはいかない。そのように思ったことであらう。『玉あられ論』の「くさぐさ」は次のように批判している。

近き世の人の好みて常によむ詞に云々。此条すべてよく書り。しかあらためんとならば、此人此書のはじめにかける歌に、まなびの窓とはなどよめるにや。これいと後とも後の詞なり。まなぶなどいふ事古く聞えず。ことに物学ぶ人の家の窓といふべきを学びの窓といふべくや。はた此書の序かけるも、此人にまなべる人なれば、此人のをしへを守るべきに言の葉の道などいふ事をかき、さて文のさま、名所をもていひつらねたるわたり、つたなさいはんかたなきはいかにぞや。

この項目は『玉あられ』においては、近頃の人が詠む歌に「聞ぐるしき」言葉が多いとした上で、思い出すままに具体例を列挙するというものである。そして、最後に「右の詞ども、必ひがことにはあらぬも、近き世めきて聞ゆる也。此たぐひなほ多かるべし」と締めくくっている。『玉あられ論』はそこに書かれていることの正当性を認めた上で、改めるべき例として宣長の「まなびの窓」と高蔭の「言の葉の道」を祖上に載せて批判するのである。この場合、批判よりも揶揄といっ

た方が適當かもしれない。ここでの議論には賛同した上で、その議論における攻撃の鋒先を自らの文章に向けられたのであるから、癪に障る思いがしたのでないだろうか。言わば搦め手から虚を突く攻撃であり、真正面からの攻撃よりもむしろダメージが大きいと思われる。これに對して高蔭は次のように反撃している。

弁云、まなびの窓といふ事を難じたるは、此歌を万葉古今集などの風の歌と思へるにや。此うたはもとより後世風によまれたれば、後世の詞を用ひられたるなり。すべて歌も文もその風体の時代に應じて詞をもつかふものなるをしらずや。なほ玉あられの書は大かた廿一代集の程はさのみわろき癖も見えずとある如く、中昔の詞はもとより捨ざるところなれば、なでふ難かあらむ。抑皇国の詞づかひの本を以ていはゞ、いかにも物学ぶ人の家の窓といふべき事なれども、中昔となりては学びといふ事もひとつのわざの名となりたれば、その学びをする窓なれば、何事かあらむ。源氏物語に人のむすめの事に窓のうちなる程、又とりかへば

や、物語にも、窓のうちにこもり給へりしほどこそ
などいへり。これらも親の家の窓とはいはぬをや。
すべてまなびの窓などいへるを難ぜば、既万葉に
も此類ひこれかれあり。【そは末にいふべし。】又
中昔以来の歌には猶いくらも難すべき事あるべし。
又まなぶといふ事古く聞えずとはいかにぞや。学
びのまども言の葉の道【我道ともいへり。】も中昔
よりこなた常に云事なるをしらずや。なほ例をい
はゞ、万葉にすら遊びの道などいひ、源氏物語
には匠のわざを木の道とさへ云るをや。また序の
つたなき事はさることなれども、名所を以ていひ
つらねたるを論じたるなどは、すべて古への文章
を見たる事もなきいひざまなり。

「まなびの窓」という言葉は後世の言葉であるが、後世
風の歌の中に詠まれたものだから問題ないというのが
高蔭の見解である。宜長は歌を詠むにあたつて、古風
と後世風という二様に詠み分けることを提唱している。^(注14)
高蔭はこれを受けて、「まなびの窓」を古風歌に詠めば
問題だが、後世風歌に詠み込んでも一向にかまわない

というわけである。この反論は古風後世風詠み分け主
義を認めた上でなければ意味をなさない。そして、そ
れは鈴屋派にのみ有効な前提なのである。^(注15) また、これ
とは異なる観点で、源氏物語やとりかへばや物語、あ
るいは万葉集に前例があると主張しているが、それが
先例と認められるかどうかは検討が必要な事柄である。

このように「まなびの窓」と「言の葉の道」につい
て、受けた批判以上に証拠も取り揃えて周到に反論し
ていると言つてよい。実はこのような反論は、このの
箇所だけではなく、全く関連性のないところでも展開
されている。^(注16) 文の部「よりて」の項目で次のように述
べているのである。

学^レの窓言の葉の道などはいやしき言葉といふにも
あらぬを、何とてとがめたる事ぞ。己が勝手不
勝手にまかせて立論のかはるこそをこなれ。学び
のまど言の葉の道などは中古以来の風の歌にはい
さ、かもきらふまじき詞なり。

「よりて」という語が漢文による類推で誤った用法で使
われているという『玉あられ』を承認した上で、『玉蔽

付論』が漢文による類推は必ずしもすべてが悪いわけではないと留保した。『弁玉あられ論』はそこをとらえて、漢文の例に倣う用例が許されるのであれば、どうして「まなびの窓」や「言の葉の道」が許容されないのか、というのである。批判をする上で論理の一貫性がないというわけだ。問題は高蔭の反論が有効かどうかということではない。高蔭がどこまでもこたわることの核心に、「まなびの窓」と「言の葉の道」を批判されたことが大きな比重を占めているということなのである。つまり、自分の師と自分自身の言葉遣いを批判されたことが大きいということである。反論をしたためる動機というのは得てしてそのようなものだ。単に学問上の正当性を争うということではないのである。

こういった経緯で『弁玉あられ論』は、『玉あられ論』および『玉霰付論』が批判した項目の多くに対して反論している。そこで『弁玉あられ論』の実態を観察してみよう。『弁玉あられ論』が展開する反論の様式を次の三種類に分類することができる。

(1) 『玉あられ』批判になつていないことを非難。

(2) 『玉あられ』を誤読して難癖を付けていると非難。

(3) 詳細な検討が及んでいないという非難。

まず(1)について、歌の部「まし」についての議論がこれに該当する。

〔論〕 ましは又べきべしといふと大かた同じ意にて云々いへるはよし。さて後世ましといふべきをらんといい誤る事あり。たとへば春くる事を誰かしらましといふべきを、しるらんとよむ類なり。まして末をかねていふ詞、らんは今うたがふ詞なるをわきまへざるなり。

〔弁〕 弁云、これは玉あられにあづからざる事なるを、かくいへるはいかにぞや。但し此けぢめは此条又下なる春や来ぬらむの条などにても、おのづから明らかなるをや。

「まし」の代わりに「べし」で代用するのはよいが、「らむ」では代用できないという『玉あられ論』に対して成された反論である。関連性のない事柄に言及することを非難しているのである。これは問答が適正にな

されるべきとする厳格な立場から成された批判である。

次に(2)について、文の部「道ゆきぶり」における議論がこれに当たる。『玉霰付論』は前節で見たとおりであるが、『弁玉あられ論』は次のごとくである。

弁云、旅の道ゆきぶりに見聞たる事どもを記せる意にて、その書の名を道ゆきぶりにつけたらむは何事かあらむ。すべて書の名は心にまかせてつくべければなり。玉あられに出されたるは書の名の事には非ず。此ごろの人のすべて道の記の事を道ゆきぶりと云ものぞと心得て然云がひがことぞとなり。論者いかに見そこなひたるにか。此ごろの人の書る物を見ればとあるを、かの岡部大人のつけられたる書の名の事を指て云りと心得たるにや。もし此ごろの人の書る道の記、然名づけたるありなど、云れたらばこそとがむべけれ。

『玉霰付論』は旅日記の意で「道ゆきぶり」を用いたことを、油谷倭文子『伊香保の道ゆきぶり』の書名に言及されたとして反撃したのであるが、『弁玉あられ論』はそれは『玉あられ』を誤読したものだという。宣長

が問題にしているのは、近頃の人の文章の中に用いられる「道ゆきぶり」の用法であつて、書名を問題にしているのではないというのである。むろん、真淵を批判する意図で宣長がこの項を執筆したのではないということになる。『玉霰付論』は『玉あられ』を誤読し、難癖を付けるために批判したということであらう。

第三として、(3)について、文の部「きこゆ」をめぐる議論がこれに当たる。

〔付論〕この論はことわりよきやうなり。されど万葉にきこすとあるも、後のきこゆと同じことのやうなり。万葉のは、いふ人をうやまひたる事といふはいかゞあらん。いまだくはしく考得ねば、さだかにいひがたし。重て考さだめて、書加ふべし。〔弁〕弁云、いまだ委しく考得ねば、さだかに云がたしとはいかず。考得ぬ事ならば此論に出すべき事にあらず。万葉にきこすとあるは何れもその人を尊みたる詞にて、のたまふと云と同じ意なり。後のきこゆと同じ意としては、その歌どもみな聞ぬ事なり。そは委しく考るまでもなし。その歌を

見ればよく分れたる事なるをや。

「きこゆ」について、『玉あられ』が「いふ方よりあな
たを敬ふ語に用る詞也」として、その誤用を修正した
ことを受けて、『玉霰付論』は「きこす」との相違が明
らかではないという理由で、最終的には判断を保留し
ている。このように判断を保留し、後考をまつとする
態度を『弁玉あられ論』は非難するのである。批判書
であれば、批判しきれないことは組上に載せるなどい
うことであろう。たしかに的を射た反撃であると言っ
てよい。

このような『玉あられ論』と『弁玉あられ論』につ
いて、同時代の評判が伝わっている。村田春海の門弟
である沢近嶺『春夢独談』(天保八年成)に次のように
記されている。^(主17)

○我師の大人と本居翁とは、心やあはざりけん、
うときかたにて、かたみにそしりあひけり。かゝ
れば其門徒も、なほわが師の大人をばそしられ
けり。玉あられの論と弁とを見ても其事はしら
る。しかはあれどこの玉霰の論弁は、論のかた

より弁のかたまされりとなん、おのれはおもふ。

春海と宣長とがお互いを意識し、論争していたことは
有名であった。^(注18)それは門弟の代に至っても同様で、そ
れが『弁玉あられ論』でも明らかであるというのであ
る。興味深いのは、近嶺は春海の門弟であるにもかか
わらず、「論」よりも「弁」の方が勝っていると述べて
いることだ。

四、私淑する者の補遺——萩原広道『小夜しぐれ』

『玉あられ』が世に出て半世紀を経た嘉永二年、萩原
広道『小夜しぐれ』が出版された。全五十一丁で、秋
元安民と広道の序に鈴木高輅と広道の跋があり、出石
居蔵板であるが秋田屋太右衛門(大坂心齋橋筋安堂寺
町)の「萩原叟沼先生著述脱稿之部目録」が付されて
いる。広道は特に定まった師を持つことはなかったが、
宣長に私淑し、さまざまな面でその学説を祖述、発展
させた。語学面では『玉あられ』に倣って『小夜しぐ
れ』を著した。書名が「小夜しぐれまた音たてていぎ
たなき学びの窓を驚かさばや」によっていることから

も『玉あられ』の影響が見て取れる。広道はこの歌を巻頭に置いて、次のように序文を続けている。

かくよめるゆゑは、先師本居翁そのかみの歌どものみだりがはしかりしをなげきて、玉あられまなびの窓におとたて、おどろかさばやさめぬ枕を、とて玉あられといふ書をかきあらはして、そのひがことゝもをろうじなほされしにこそ。こゝらの年をへてほゝゆがみこし歌詞ども、やうゝ夜のあくるやうに明りもてゆきて、さるくねゝしきくせどもは大かたあらずなりにたるを、其ころよりはまたそこばくのとしを経て、いつとなくおこたりたゆめるけにや、なほ暁しらぬたぐひもありて、さまゝまほならぬ詞づかひども、打まじり、ほとゝかのふみにいひおかれたる事をさへおかしいづるたぐひも見えしらがふなるは、いとゝあちきなきわざになん。

『玉あられ』が刊行されたお蔭で、事実と異なる歌言葉が用いられるような過誤も少なくなったが、それから年を経て油断し緊張が切れたからなのか、完全でない

言葉遣いも混じるようになり、『玉あられ』で注意された事柄にも背くことが目立つのはやるせないことだと嘆いているのである。そこで広道は、主に語彙や語法に関して全八十六項目を選択し、歌の部と文の部を區別せずに論述することにしたという。『小夜しぐれ』が取り扱った八十六項目は、最後に「玉あられにならひて物せれば、かのふみにいひたるかぎりはずべてはぶきつ」と書かれているように、原則として『玉あられ』で言及されたものは含まれない。しかしながら、『玉あられ』に関連するものについては、必ずこれに言及するという形態を取る。次の通りである。

人の実名をおかしかくまじきよしは、玉あられ其ほかの物にもいましめられて（名をよぶ）

玉あられ一卷だによめらむ人はさることはすまじきを、いかなるゆゑにか、いぶかしき事なり（名をよぶ）

これは玉あられにもいはれたることなれど（古語をまじふる）

またたぐひあらしは玉あられにいはれたることく

(いひかけ)

いと、いふ詞のつかひざまは玉あられに委しくは
はれたり (いと いと)

やがてといふはすぐに、そのまゝにといふ意なる
よし、玉あられなどにもいはれたるが如くなるに
つけて (いま)

よりてといふことのひがことなるよしは玉あられ
に見えたるを (よて)

月こよひといふは玉あられにもいはれたる如く
(秋こよひ)

このように『玉あられ』への言及からは、取りも直さず『玉あられ』を尊重し、その上に自分の見解を積み上げようという意思を読み取ることができる。それは学問研究の先達に最大限の敬意を表しながら、少しでもそれを超えることを目指すということである。要するに、『小夜しぐれ』の特徴の一つは、後世の言葉遣いの誤りを正すという『玉あられ』の精神を受け継ぎつつ、別の言葉に材を取って批評するということである。その点が単なる論難書とは異なるところだ。

ところで、『小夜しぐれ』にはもう一つ特徴的な点がある。それは『玉あられ論』および『弁玉あられ論』への言及が存在することだ。八十六項目への論究のあとに「付録」として次のように書いている。

玉あられにいはれたる事どもをとがめて、ある人のかける玉あられ論といふものあり。またそれをわきまへて、三井高蔭といふ人のあらはしたる弁玉叢論といふ物あり。ともにすり本^{マキ}にして世におこなはれたり。此二つを考ふるに、論のひがめたる事は弁にことわりたるがごとく、大かたはしひていひやぶらんとしたる事どもなれど、たまゝ理ある条ども、なきにはたあらぬを、今こゝにか、げ出して試に評すべし。さるはをこがましきさしいでわざなれど、玉あられにならひていへる事のついでなるうへに、とにかくにわたくしなからんぞ、道のためなるべきと思ふばかりにわれだけくなりてなん。

『玉あられ論』と『弁玉あられ論』を比較した上で、『弁』の方が『論』よりもすぐれていることが多いとし

ながらも、『論』の方がすぐれているものを摘出して批評するものである。これは広道自身も記しているように、学問における無私の精神、公明正大な態度といえよう。目次には「弁玉叢論評五条」としており、五項目にわたって検討（評）されている。それは次にあげるものである。

○みだりにひたぶるにならひて物するから

○そは皆なぞらへてもさとねかしとぞ

○されど久かたの雲の上云々

○何事もあなかしことなるゆゑあることなるべければ

○もじあまりの句

この五項目はすべて『玉叢付論』の議論であり、その中で最初の四項目は宣長の序文における言葉遣いに關する議論である。その四項目は前項で言及したように、高蔭にとって絶対に看過できないものであつて、理由の如何を問わず、完全に論破しなければならぬものであつた。それゆゑ、高蔭の反論は時として無理筋の反論とならざるを得ないこともあつた。だから、「論に

いへるかたまされるに似たり」や「論にいへる事どもみながらひがことにはあらず」というように、『玉叢付論』を擁護するような表現も出るのである。これらは私淑する宣長に対する批判であるにもかかわらず、正当性のあることは認めるといふ、広道の学問に対する誠実さを反映していると言つてよい。

『小夜しぐれ』に内在する最も興味深い点は、末尾に置かれた『玉叢論弁』の写本に關

する論究である。まずはじめに、広道は当該写本について次のように述べている。

○わが友松岸恭明のもとに写本ウツシマキの弁玉叢論をもてるを見るに、すり本とは所々マキいたく異りたり。案にすり本は世に出してあまねく人に見せんとせし時などに、再びそへもはぶきもしたるものと見えて、初の条よりしていかなる粗忽カハぞやなど、はげしく弁じたる詞どもをば大かた略きてなだらかにし、少しづつ、はそへたる条もあり。されどおほむね同じおもぶきなれば、其をちくくらべいはんもわづらはしくて、こゝにはもの

せず。たゞ巻の末の処、板本のかたはへさて全篇のすがた勢などはこれをよく得て後の事なり」といふ処にてとちめたるを、写本のかたはいま三ひらばかりの紙ありていへること猶多かり。いまこゝにかゝげ出して世人に示すべし。さるは削りたるも添たるも作りぬしのこゝろありてせし事なるべければ、今さらにさしいで、いひさわぐべきにはあらざれども、初学のためにはいとやうある事ども、見えたるうへに、おほかたのありさまを推量るに、そのかみは論者にさしむかひていへるなれば、しか心しらひせしものとおほしけれど、今はさしもはかるべきわざともおぼえねばなり。

『玉霰論弁』の写本は松岸恭明なる人物が所有していたものという。松岸恭明は明治十年代に大阪天満宮の儀式に、寺井種清や近藤有孚などといった神職とともに「当番所雑記」に「出頭神官」として登場する人物である。^(注19)幕末の大阪で国学者として活動した広道にとつて、天満宮の神官は親しい存在だったのであろう。その松

岸恭明から借り出した『玉霰論弁』には版本と異なるところがあり、それは初学者のために益があると考えて公にするというのである。このことはすでに鈴木淳氏が指摘している。^(注20)版本と異なっているところは次の四点である。

- (1) 『弁玉あられ論』「時代のふりのたがひ」における写本にのみある文章。
- (2) 本居宣長による『玉あられ論』への評。
- (3) 本居宣長による『玉霰付論』「時代のふりのたがひ」への添削。
- (4) 稻掛大平による『玉あられ論』への評

(1) と (3) はともに「時代のふりのたがひ」をめぐる高蔭と宣長の論述であるが、少し冗長であるために割愛したものである。(2) は『玉霰付論』の著者が主導権を持って『玉あられ論』を添削したのであろうということ推定している。(4) は大平が『玉あられ論』を読んで感じたことであり、注目すべきことが書かれている。次の通りである。

○わが同じ学の友なる稻掛大平が此論を見て云く、

此論者吾翁^ガの歌文をさんぐにそしりはそしりたれども、みづからかける此文を見るに、今のなみくの人の文とはちがひて近世のわるき癖もなく、また古学者の癖もさくなく、まさしく良薬一粒の玉霰丸のよくまはりたる功験いちじるく見えてめでたしく。

論者は宣長の文章を誹謗しているが、その文章自体は近年の学者の悪癖もなく、また古学者の変な癖もないのは、『玉あられ』の効能が効いたお蔭であろうと、『玉あられ論』の著者への賛辞を惜しまないでいる。大平は宣長の養子となり、鈴屋を継いだ人物であるから、『玉あられ』を批判しているのを見て、反論あるいは非難してもおかしくない。むしろ、大平の行動様式からすれば、率先してそのような行動を取る人物であると考えられる^(註2)。そのような大平がこの文章を褒めるのはよほどのことであろう。

大平は寛政十二年に、『八十浦の玉』編集するに際して春海に協力を求めた折、春海との間で規範とする歌集をめぐる^(註3)論争になった。春海は宣長が真淵の教

えを守らず、新古今集を最もすぐれた歌集とする方針に異を唱え、『美濃の家づと』を批判した。大平は大平で、江戸派は真淵の歌論を祖述すると言いながら、それを曲解して広めているとして応酬したのである。寛政十二年以降はそのような間柄であるから、大平のコメントはそれ以前になされたものであると推定される。匿名ではあるが、著者が江戸派であることは、宣長にも大平にも薄々はわかつていたと考えられるからである。あるいは宣長が『玉あられ論』を受け取り、三井高蔭が『弁玉あられ論』をしたためた寛政五年から、あまり時をおかずに執筆されたのではないかと思われる。いずれにせよ、広道の補遺は当時存在した写本『弁玉あられ論』の姿を復元しており、江戸派と宣長・大平との関係を髣髴とさせるものでもあって、はなはだ興味深い。

五、江戸派の手土産―井上文雄『伊勢の家づと』
『小夜しぐれ』の出版から十年を経た安政六年、『伊勢の家づと』が刊行された。全三十二丁、巻頭には文

雄と竹川政恕の序を置き、巻末には藤尾景秀の跋を置き、全四十九の項目について論じている。著者の井上文雄は岸本由豆流や一柳千古を師として国学を修めた、純然たる江戸派直系の歌人である。文雄は田安家の藩医を勤めたが、歌人として令名を馳せ、家集『調鶴集』（慶応三年刊）を出版した。『調鶴集』は門弟の佐々木弘綱の尽力により出版されたものであるが、『伊勢の家づと』の成立もまた弘綱の存在が大きく関わっている。文雄は自序に次のように記している。

いせの国ひと佐々木弘綱、去年の秋より我もとに物学しつるに、此比国に帰りなんとて、いかで和学のひとつのために、彼玉あれやうの書また世のひとつたちのかたくなに僻心得したる事どもかきあつめてたまはくなん、とこふにまかせてかくは物しつ。とみの業なれば証歌なども唯おもひ出るまなれば、

僻事と人やみるらむおほかたのならひにたがふ
いせの家づと 文雄

弘綱が江戸に出て文雄の許で学問を修め、帰郷する際

に手土産として『玉あれ』のようなものがほしいと申し出て実現した書物であるという。「伊勢の家づと」とは弘綱が伊勢に帰る時に持たせる手土産の謂いである。「証歌」は「伊勢人はひがことす」という諺を踏まえたものであつて、書名が「伊勢の家づと」であるからといって「僻事」ではなく、正しい事が書かれてあるというわけである。^(注23)この書名は明らかに『美濃の家づと』を意識した名であり、伊勢は宣長の故郷でもあったのであるから、『伊勢の家づと』は江戸派が伊勢に送り込んだ手土産ということにもなる。

もちろん、『伊勢の家づと』は『玉あれ論』のように匿名にしなければならぬような批判書ではない。むしろ、『玉あれ』の精神を受け継ぐ著書であつた。文雄は書中に「玉霰といふ書」という項目を立てて、次のように述べている。

本居翁の著^{アヲ}はされたる、玉霰といふ書、初学の人のかならず見るべき書なり。但し今の世の人、彼書にはれたることゝもをかたく守りて、花のさけるはさきてある事なれば、花さきしとはいひが

たし。とてもは無下の俗言なり。螢火一花などは、歌によむべからず、とやうにいひしらふたぐひおほかるは、中々に翁の心ばへにはたがふべし。彼書は翁ふと思ひよられしに、筆にまかせて一わたりのことわりを物せられしみにこそはあめれ。そもく歌はわるき詞も取なしがらにて、かへりて一うたのにほひとなり、よき詞もいひなしわろければ、一歌をそこなへり。すべて古く例あらむ詞どもは、今もならひ物せんに難なし。たとりなしがらのよきあしきを、習ひしるべき事を肝要とすべし。

『玉あられ』は初学者が必ず参照すべき書物であるという前提のもと、その内容が必ずしも正確には伝わっていないのである。そうして、『玉あられ』で言及されている言葉を取り上げて、その指摘に忠実に従うことはかえって宣長の精神に反するといわけである。たとえば、「花のさける…」（詞に三つのいひざまある事）、「とても」（「とても」）、「螢火一花」（「ほたる火」）などといった表現である。それというのも、『玉

あられ』は宣長が思いついた順に書き付けたものに過ぎないからである。このようにひとしきり『玉あられ』に盲従することの問題点をあげた上で、持論を展開する。すなわち、歌言葉の良し悪しはあらかじめ決まっているわけではなく、すべて使い方に拠るのであって、歌の中で言葉をうまく取り扱うことが重要であるということだ。ただし、この考え方は『玉あられ』の議論を根底から覆すものではない。『玉あられ』に記された例にだけ従っていればよいというものではない、ということである。このことは必ずしも『玉あられ』を論難しようというものではない。すでに世に出て六十年以上を経て、修正すべきところが出てきたということなのである。『玉あられ』の否定ではなく、むしろその精神を継ぐという意味合いが読み取れるのである。このことは確認しておく必要があるだろう。

さて、文雄がさきの引用に続けて「玉霰にいはれたることゝも」として組上に載せた『玉あられ』の項目は、み・し・と、うくる上の格・かへて・見ゆる見え・なほ・いく・やらぬ・はて、・とても・物うき・

思ひぐま・おひ風・とほそ・ほたる火・春をむかふる・
みといふ詞のいひかけ・文字あまり、という十八項目
である。注目すべきは、それらがすべて「歌の部」に
属する言葉であるという事実である。おそらくそれは
文雄の関心が文ではなく、歌に集中していたというこ
とであろう。

具体的に「とほそ」を例に『玉あられ』と『伊勢の
家づと』を見ることにしよう。まず、『玉あられ』は次
のごとくである。

とほそは、樞^く字を書て、ひらき戸のほぞ也。然る
をへ柴の戸ほそなど、たゞ戸のことによむはい
かゞ。こはやゝふるき歌にも見えたれど、心得お
くべし。

「とほそ」について、それが「柴の戸ほそ」などと、本
来の意味を逸脱して用いられていることに疑義を呈し、
その誤用を戒めているのである。これに対して、『伊勢
の家づと』は次のように記している。

もとの意は、樞の字の意にて、戸のほぞの事なれ
ど、転じては誰つ戸の事にのみいへり。はやう源

氏物語若紫の巻に、おく山の松のとほそをまれに
あけて云々、又夫木集卅一に、夕顔のみさへむな
しきとほそこそ云々などみゆれば、今まねびよま
ん事難なし。雁がねはもと雁が音なれど、いひな
れてはたゞ雁のことにのみいへるがごとし。

「とほそ」は元来は「樞」であるが、それが転じて「誰
つ戸」にだけ言うという。『玉あられ』が「ふるき歌」
とだけ書いていたものを、『伊勢の家づと』は『源氏物
語』や『夫木集』の用例を明示して、そのように詠む
のは問題ないというのである。さらに「雁がね」に言
及し、本来は「雁が音」（雁の鳴き声）であつたものが
転じて「雁」となつた例を裏付けとして追加している。
この議論は『伊勢の家づと』の方に説得力があると思
われる。それというのも、そもそも宣長自身が言葉の
意味について、語源よりも用法・用例が重要であると
考えていたからである。たとえば、『玉勝間』八の巻
「言の然いふ本の意をしらまほしくする事」（四二三）
の中で、次のように述べているのである。

物まなびするともがら、古言の、しかいふもとの

意を、しらまほしくして、人にもまづとふこと、常也。然いふ本のころとは、たとへば天といふは、いかなる意ぞ、地といふは、いかなる意ぞ、といふたぐひ也。これも学びの一にて、さもあるべきことにはあれども、さしあたりて、むねとすべきわざにはあらず。大かたいにしへの言は、然いふ本の意をしらむよりは、古人の用ひたる意を、よく明らめしるべき也。用ひたる意をだに、よくあきらめなば、然いふ本の意は、しらでもあるべき也。

宣長は言葉の原義を知ることよりも、言葉の用法・用例によつて語義を探ることの方が重要であると記しているのである。「天」や「地」というのは、言うまでもなく古事記冒頭の言葉であつて、『古事記伝』にも同じことが記されている。当時は語釈といへば、言葉の語源を追究することによつて語義を明らかにするというのが普通であつたごとくである。言葉の用法から語義を導き出すという考え方は画期的であつたと言えよう。宣長はそのことを多くの古典文学作品の解釈を通

して体得した。ところが、個別具体的な例に出くわすと、体得した法則を適用することは必ずしも容易ではなかつたということであらう。「とほそ」以外の議論もそれぞれに説得力のあるものである。そういった意味で、『伊勢の家づと』が指摘したことは、宣長にとつて『玉あられ』の好ましい修正と言つてよからう。

ところで、『伊勢の家づと』は『小夜しぐれ』についても言及している。『玉あられ』十八項目の検討の後に「さよしぐれにいはまほしきことゞも」という一項目を置いている。まずは批判の対象となつてゐる萩原広道『小夜しぐれ』『俗情俗語』を見てみることにしよう。『俗情俗語』の冒頭は次のとおりである。

初学のともがら題をとりたるに、何事をいひてよからんとも思ひつかれず、いかでくど打かたぶきをするほどに、後にはほけくしくなりて夢うつゝのさかひをだにわいたためぬやうになるもの也。さるをりにはこのごろの俗情ヨコロにおもふまゝの事をまづ思ひかまへて、さて詞をばふもとの蛭、浜のまさご、なにくれの物をひろひ集めてものする事なれ

ども、歌心歌詞をしらざれば、なに事とも聞わかれず、たゞ三十一もじのみ歌のやうに聞ゆるなん
いとあぢきなき。

初学者が題詠で歌を詠む場合に、みずからの「俗情」を想起し、それに言葉をあてはめるようなことをするものだから、三十一文字であるというだけのものが出る。それは何とも情けないというのである。これに対して、『伊勢の家づと』の当該項目は次のように批判する。

萩原何がしがさよしぐれといへる書にいへらく、
歌に雅情ガジャウと俗情とのけぢめあり、といへるは僻事ヒキコトなり。歌は彼と我との情をかよはず、平常通俗ヘイジャウツソフの用ある道なり。万葉集は泊瀬朝倉フクセアサクラの御代より、奈良の御代迄の風俗フウゾク々情也。古今集は奈良の末より昌泰延喜シャウタイエンギの俗情風俗なり。後撰以下つきく、當時カミの常の情態を、其まゝによめる物なり。そは彼集ども、又其世の人々の家集どもを心とめて味へ見ば、おのづからしるるべし。別に雅情ガジャウといふものあることなし。すべて人々生れつきたる性情

をありのまゝにいひ出るなん歌といふもの、本意なりける。

広道が歌に「俗情」と「俗語」を持ち込むことを戒めるのに対して、文雄は歴代の諸歌集もその時々「風俗俗情」「当時の常の情態」を模して歌に詠んでいるのであつて、「雅情」というものが特別にあるわけではない、と主張するのである。真つ向から見解が対立しているわけである。それでは「俗情」や「雅情」とは一体何なのか。「俗情」について、広道は次のように述べている。

このごろのよごゝろとは、たとへばつまこふる鹿の声をき、霜にはねぎる水鳥のおとを聞ては、芹牛蒡セリナマきりかて、あつものにせん事を思ひ、庭白たへにふりつもる雪を見、軒のしづくのしめやかなる春雨の音をき、ては、ひぢりこぬかりて道にころばんことを思ふ類にて、みないみじきさどび心なり。

広道は「俗情」について、つま恋をする鹿の声や霜に跳ねまわる水鳥の音を聞いて、芹や牛蒡を交えて羹に

することを思い、庭が真つ白になるまで降り積もつた雪や軒の滴が静かな春雨の音を聞いて、泥がぬかるんで道で転ぶことを思うようなもので、すべてとんでもない田舎びた心であるという。要するに、「俗情」とは下品なことや俗なことを意味するのであろう。そのような「俗情」を払拭するためには、古歌集や類題集を読み込んで「雅情」がいかなるものであるかということを知らねばならないと続けるのである。これに對して文雄は次のように反論する。

抑^{ソモ}人情の厚薄^{コハハク}こそあらめ、いにしへも今も人情にかはる事やはあるべき。さるをうたよまんとてみづからのおもひよれるすぢを捨て、いにしへの雅情^{ガジヤウ}はいかにと尋ねよまむは、古人の口真似する作り物にこそありけれ。天地を動かし、鬼神をあらはれとおもはするも、性情の誠^{マコト}をいひ出るから也。いつはりのつくりものいかでさる感応^{カンスウ}あらむ。無下の初学の人ならむからに、鹿の声水鳥の羽音をきゝて、芹^{セリ}、牛蒡^{ゴバウ}きりかて、とおもひ、降つむ雪、しめやかなる春雨に、道のぬかりを愁ふるこ

とき、殺風景^{サツフウケイ}なる事かはあらむ。

昔も今も「人情」に変わりはないから、自らの思いを捨てて「雅情」を求めるのは似せ物であるという。古今集仮名序にあるように、歌に効用があるのは「性情の誠」を詠んでいるからであつて、偽りの作り物では力がないとする。そうして、風流な鳥獸の声を聞いて鍋を思い、雪や春雨の降るのを見てぬかるんだ道を憂えるような殺風景なことは、たとえ初心者でも詠むことはない、として切り捨てているのである。

文雄が『小夜しぐれ』を批判する根拠は、おそらく村田春海『歌がたり』における次の言説と響き合っていると思われる。

うたはこゝろのまことをのぶるものなれば、かならずおのが物ならむやうにこそあらまほしけれ。

これは古風歌と後世歌を詠み分ける宣長の歌論に對して、昔と今の言葉を厳密に区別することを批判して述べたものである。歌は心の真実を述べたものであるから、借り物ではなく自分自身の物にすべきである。歌の言葉や心の雅俗に関しても同様であつて、それらを

峻別することに大した意味はないというわけである。

つまり、文雄が根拠としたものは『歌がたり』に記された「心のまこと」の議論に近い。そういった意味で、文雄は江戸派直系の歌人であったということである。

『伊勢の家づと』の特徴の一つと言つてよい。

もちろん、『伊勢の家づと』の特徴はそれだけではなく。「さよしぐれにいはまほしきことゞも」の後に次のような項目が続くのである。序歌・俳諧・月にさゆる・夢にやぶる・路・あぢきなく・たき・も・れ・そこひなく・つれて・みだす・わが思ひとれるやう・俗言・枕詞・熟字・用要・なでふ・大江戸・にひむろ・朝日子・もちひの仮字・さくはな・古意・丈夫風の二十五項目である。そこには歌言葉に関して独自の検討がなされている。さらに言えば、『伊勢の家づと』には二篇（文久二年序）と三篇（元治元年序）という続編が刊行されている。それはもはや『玉あられ』や『小夜しぐれ』とは無関係の書物と言える。続編が刊行されたということは、『伊勢の家づと』がよく読まれ、そして必要とされたということを意味する。『玉あられ』の新たな展

開である。

六、『玉あられ』増補版―中島広足『玉霰窓の小篠』

篠

『伊勢の家づと』刊行からあまり間を置かず、文久元年六月に『玉霰窓の小篠』が出版された。本文は全百三十六丁で上巻・中巻・付録の三冊、広足の自序（嘉永七年七月）を置き、秋田屋太右衛門ほか六肆より出した。広足の自序には次のようにある。（注25）

学の窓に音たてられし玉霰よ、耳とき人はとく聞おどろきて、いぎたなかりし夢ものこらず心さやかに成にたるを、猶み、おぼくしきはたしかにも聞しりえずてねぶりがちなるおほかめり。しのやの軒にふる霰も其こたふる物によりて音さやかに聞なさるゝものなれば、こたび其あかしとすべき歌文どもをこれかれかき出つらねあげて、初学のものしるべとなしつるは、これをもてかのあられの音をいよゝたしかに聞しらせむとてのしわざなりけり。さるはふるき歌に、さゝ葉にうつやあ

られのたしぐに、とよめるをおもひてなれば、やがて窓の小ぎ、と名づけつるになむ。

『玉あられ』に言及されていることを証立立てるために本書を書いたという。『玉霰窓の小篠』という書名は古歌に拠っているという。古歌とは古事記・下巻（允恭天皇）で木梨之輕太子が「笹葉にうつや霰のたしだしに率寝てむ後は人は離ゆとも」と詠んだ歌を指す。霰が笹の葉をたしだしと打つ、というところから「窓の小篠」と命名した。霰が降っただけでは目が覚めぬ人のために、窓辺に笹の葉を添えて音を増幅しようというわけである。ここから『玉あられ』で言及されたこととの「あかしとすべき歌文ども（古歌古文の例）」を集成するという意図が見える。広足は先達の業績を扶翼することを得意とした国学者で、『詞八衢補遺』（安政四年刊）や『詞の玉緒補遺』（安政七年刊）などを出版している。『玉霰窓の小篠』もまた『玉あられ』の増補であり、補遺でもあった。

「歌の部」は『玉あられ』の六十三項目のうち三十四項目について、「文の部」は四十五項目のうち二十四項

目について言及している。要するに、『玉あられ』の約半分の項目が増補の対象になっているわけである。具体例を検討しよう。『玉あられ』「歌の部」の「なもじたらぬ語」は次の通りである。

「へたちななくしそ、へ物な思ひそなどいふ類を、もじの五七の調べにあまる時は、へたちかくしそ、へ物思ひそなどやうに、なもじをはぶくこと、ちかき世にをりく見ゆるは、いみじきひがこと也。下なるそを略けるは、万葉などには、多くあれども、それも古今集よりこなたには見えず。ましてなをはぶける例は、すべてなきこと也。こはなもじをのぞきては、聞えぬ詞なるものをや。」

いわゆる「な…そ」の用法について、和歌の文字数の問題から、これに反して「な」が省略される用例があるとした上で、それがとんでもない間違いであるというのである。「そ」が省略される例はあっても、「な」を省略することはない。これを受けて『玉霰窓の小篠』では次のように増補している。

○広足云、此説まことにさることなり。然るを枕

冊子『春曙抄本十一』に「いまいらへけふほと
申給ひそ」とあり。こはとの下になもじを写お
とせるものなるべし。此頃の文になもじをはぶ
くやうのひがことはたえてなき事也。【こは抄本
の誤なるべし。古写本をもて正すべし。】又落く
ば物語一に「こ」になからは家の内に「ありそ」
これにも「の下になもじを写脱せるなり。初学の
人これを証例となす事なかれ。

広足は『春曙抄本枕草子』と『落窪物語』に「な」が
省略される例をあげて、これがそれぞれの理由で誤写
されたものであると推定し、本来の形を守ることを提
唱している。『玉あられ』が問題にしたのは和歌におけ
る省略の例であり、その原因は文字数の問題に起因す
ることは自明であつた。これに対して、『窓の小篠』は
散文の用例であるから、それでは説明がつかない。つ
まり、広足がここで補足しようとしたことは、宣長が
提起した用例をより広い視野のもとにとらえ直し、こ
れを包括的に説明するための原理を見出すということ
である。この項目以外でも『玉あられ』に言及された

言葉の用法について、膨大な用例を列挙することによ
り、圧倒的な説得力でその用法の正当性を主張するの
である。このように『玉霰玉の小篠』は『玉あられ』
を増補し、補遺する意図があつたということがわかる。
ただし、『玉あられ』の項目について、広足はすでに他
の書物を著す際に論究しているものもあつた。次のこ
とくである。

「蔭ふむ道」(詞八衢補遺) — 「だに、すら、さへ」

「ひにそひて」

「海人のくぐつ」 — 「おひ風」「松柳などにけぶり、

けぶる」

「かしのくち葉」 — 「もじあまりの句」

「手引の糸」(詞の玉緒補遺) — 「とばかりに」「おも

ひきや」「が」

「かしの下枝」 — 「川をこす」

こうした言葉については自著を参照することを明記し
ている。論述の重複を避け、効率的に著述しようとする
意思がうかがえる。また、自著だけでなく、石川雅
望「雅言集覧」(「いとふ」、千家尊孫「比那能歌語」

（「ませし、しし、せし」などの書物もまた参考文献としてあげている。そこには『玉あられ』の精神を受け継いで、初学者が歌文を学ぶ際の指針を示そうという高い志が見える。それは反論のために反論をしたり、自己顕示のために自説を無理矢理押し通すといった類とは別次元の行為であると言つてよい。広足の学問は、文字通り宣長学の祖述であつたということができよう。

なお、明治二十一年になつて中島惟一（広足の孫）の序文を添え、広足の遺稿二卷（後編上巻下巻）を増補して、全五巻として吉川半七より出版した。『玉霰窓の小籙』は膨大な用例による裏付けを伴つた古語の用法の指南書となつた。『玉あられ』が向かうべき到達点と言つてよからう。

七、結語

『玉あられ』はそれまで歌学書や随筆の中で論じられていた、和歌や文章の用法（文法や語法）に関する議論をほぼ無作為に並べたものである。これに対して、宣長直系の鈴屋派と宣長の兄弟弟子である江戸派との

間で論争が起きた。極めて単純に図式化すれば、村田春海と井上文雄は江戸派として『玉あられ』を批判し、三井高蔭と中島広足は鈴屋派として『玉あられ』を擁護したという構図になる。しかしながら、このような単純化は学統の人間関係の上で身も蓋もなく、研究の進展という点でも意味がない。そこには批判や論難という形、祖述や増補という形には帰納されない、国文学研究上の進歩があつた。むしろそれは最短距離を行く直線的な進歩ではない。むしろ行きつ戻りつといった、螺旋状の進歩と言つてよい。はたしてそれが進歩と言えるのかも定めがたい、遅々とした歩みであつた。しかしながら、そこで行われたことは、確実に何らかの形で役に立っている。批判や論難といった、一見好ましくなくと思われる議論の中に、かえつて元の主張を裏付けし、補強するような種類のものもあつた。よしんば、それが全く後ろ向き（主20）の議論であつたとしても、「失敗学」が次の成功を導くように、後世に蹉跌を残したという点で功績があつた。そういった意味で、近世後期における『玉あられ』論争は有意義で

あったといつてよからう。

そうして、明治維新を経て国学が国文学へと再編された時、『玉あられ』は一体どうなったのか。国学者は研究とともに詠歌や作文をすることが必須の課題であったが、国文学者は必ずしもそうではなかった。それゆえ、『玉あられ』で指南された、詠歌や作文の際に必要な知識は当面は身につける必要がなくなつたのである。また一方で、『詞の玉緒』などのような純然たる体系的研究書でなかつたために、各項目について個別に議論されることは少なかつたが、『玉あられ』そのものが議論の中心になることはなかつたのである。要するに、『玉あられ』は学者が身につける指南書としても、学者が議論すべき研究書としても中途半端な書物であつたがために、国文学や国語学の学界から忘却されたと言つてよい。だが、『玉あられ』的なものは、現代においても古典教育の世界でしっかりと生きてゐる。中等教育における国語科の教科書や参考書の中に、その精神は立派に受け継がれているのである。

注

- (1) 『著述書上木覚』には「玉あられ二番校合」があり、十一カ所の校正箇所が記されている。また、寛政四年六月二十六日付千秋宛書簡には、誤植の指摘への返答が記されている。
- (2) 元克や守瓶に宛てた書簡によれば、『玉あられ』は一部四匁から四匁五分で売買されていた。
- (3) 『玉勝間』六の巻「玉あられ」。本項目は寛政七年九月に版下が出来し、同十年十月に出版されている。
- (4) 蘆庵にも『玉叢難詞』なる論難書があつたようであるが、現在はその所在不明。
- (5) 「みつ子」の「子」は「る」の誤記であることが鈴木淳「玉あられ論 作者考」(『江戸和学論考』、ひつじ書房、一九九七年二月)で言及されている。
- (6) 川越市立図書館蔵『玉あられ』に斎藤彦麻呂の自筆書入があり、そこに彦麻呂の説として記されている。
- (7) 鈴木淳前掲論文参照。
- (8) 中村好古「古翁雑話」の証言による。
- (9) 鈴木淳前掲論文参照。
- (10) 拙著『村田春海の研究』(汲古書院、二〇〇〇年十二月)序論「江戸派という現象」参照。
- (11) 「美濃の家づと」の中で定家歌を添削したのは典型例である。
- (12) 杉田昌彦『宣長の源氏学』(新典社、二〇一一年一月)参照。
- (13) 春海は宣長と本文観は異なるけれども、宣長の真淵作品への

改変はある程度は受け入れたようである。それは『賀茂翁遺草』から『賀茂翁家集』への改稿の中に確認できる。詳しくは千葉真也「本居宣長『玉あられ』と『賀茂翁家集』」(『鈴屋学会報』二十七号、二〇一〇年十二月)参照。

(14)『うひ山ぶみ』(ノ)「又後世風をもすてずして云々」自注。

(15) 古風後世風詠み分け主義については、江戸派の代表的歌論『歌がたり』の中で批判されている。

(16) 歌の部「遊ぶ」の項目で、『玉あられ論』が再度この二語について批判したのに対して、『弁玉あられ論』が反論したところにも見られる。

(17)『続日本随筆大成』八卷(吉川弘文館、一九八〇年八月)より引用した。

(18)拙著『村田春海の研究』第四部「反江戸派の歌論」参照。

(19)『なにわ・大阪文化遺産学叢書14 天神祭と流鏑馬式史料 慶応元年〜明治二十年』(関西大学なにわ・大阪文化遺産学研究センター、二〇一〇年三月)参照。

(20) 鈴木淳前掲論文参照。

(21) 柴田常昭が『美濃の家づと』を批判して論難書を書いて送ってきた時、大平は徹底的に『美濃の家づと』を弁護する書をしたためている。

(22) 拙著『村田春海の研究』第三部「村田春海の歌論」参照。

(23) この諺を踏まえた歌も多く、「伊勢人はひがことしけり津島より甲斐川ゆけば泉野の原」(伊勢記)や「伊勢人はひがことしけりささぐりのささにはならで柴とこそなれ」(伝西行)などと詠まれている。

(24)『うひ山ぶみ』(ツ)「語釈は緊要にあらず」の自注でもほぼ同様のことを述べている。

(25) 文久元年六月刊(奥付)の版本による。なお、明治二十一年刊の活字本には序文に文字の異同がある。

(26) 文学研究上の「失敗学」とは「誤読」のことであるが、「誤読」には人の想像力と創造力を養成する機能がある。拙編『江戸文学』三十六号(ぺりかん社、二〇〇七年六月)特集「江戸人の「誤読」」参照。

【付記】本稿は二〇一三年度科学研究費助成事業(学術研究助成基金助成金)基盤研究(C)「本居宣長の国学の受容と国文学の成立に関する総合的研究」の成果の一部である。